

① 漢字

解答

- (一) ① (二) ② (三) ④ (四) ② (五) ④  
 (六) ① (七) ③ (八) ② (九) ④ (十) ①

解説

漢字を正しく書き分けるには、その漢字の持つ意味を知っておく必要があります。部首は意味を表していますので、同じ部首を持つ漢字には共通する意味があることも覚えておきましょう。

- (四) 「みようじょう」①「せつめい」、②「みようちよう」、③「めい  
 いかい」、④「めいさいしよ」。
- (五) 「ぎようそう」。「形相」は〈普通ではないと感じさせる表情〉の  
 意。①「けいようし」、②「けいしきてき」、③「えんけい」、④「に  
 んぎよう」。
- (六) 「郷里」①「故郷」、②「強敵」、③「鉄橋」、④「鏡台」。
- (七) 「通帳」①「潮流」、②「調子」、③「帳面」、④「県庁」。
- (八) 「立つ」①「絶つ」、②「立たない」、③「建つ」、④「断つ」。
- (九) 「収める」①「治める」、②「納める」、③「修める」、④「収める」。
- (十) 「清算」①「清算」、②「生産」、③「精算」、④「成算」。

② 国語知識

解答

- (一) (a) ③ (b) ① (c) ② (二) (a) ④ (b) ①  
 (三) (a) ④ (b) ③ (四) (a) ④ (b) ③ (五) ①

解説

(三) それぞれ文節に分けると、(a)「姉は／毎日／熱心に／ピアノ  
 の／練習を／して／いる。」、(b)「私の／家は／小高い／丘の／上  
 に／ある。」となります。

- (四) 単語は、文節よりさらに細かく、言葉の最小単位まで分けたも  
 のを言います。単語に区切るには、まず文節に区切り、次にそれ  
 だけで意味のわかる単語(自立語)を抜き出します。そして抜き  
 出した以外の単語(付属語)を確認するとよいでしょう。(a)「し  
 まった」は「しまう」という自立語と「た」という付属語からな  
 っています。(b)「かすかに」は「かすかだ」という一語の自立語  
 が活用したものです。
- (五) 「何(だれ)が(は)――」どうする・どんなだ・何だ・いる  
 (ある)の形をとる関係を「主語・述語の関係」と言います。

### ③ 古文

#### 解答

(一) ① (二) ④ (三) ② (四) ② (五) ①

#### 解説

【出典】『醒睡笑』

作者は、京都誓願寺の法主となった高僧の安楽庵策伝です。京都所司代である板倉重宗の依頼を受け、一六二三年に書き下ろされた。織田信長や豊臣秀吉といった武将の逸話や、自身が幼少から耳にした話、『宇治拾遺物語』などをもとにしたと思われる話があります。単なる笑い話というよりも、説教をする際に使える話として書きためたと言われています。後に『醒睡笑』をもとにした落語が多く作られ「落語の祖」と言われるようになりました。

(一) まず1行目に登場する「大名」が主人公です。その大名と「近習の侍(〓そば近くに仕える侍)」との会話の場面なので、登場人物は①の「二人」が正解です。「臣うけたまはりて」の「臣」は〈家来〉という意味で「近習の侍」と同一人物。なお、「下劣(〓しもじもの者)」は、〈しもじもの者が申し伝える……〉というように、文章の中で話題になっているだけなので、登場人物としては数えません。

(二) 語頭以外の「はひふへほ」は現代仮名遣いに直すと「わいいうえお」になります。ですから④の「むかわせたまい」が正解です。

他に「ぢ・づ」は「じ・ず」に、「ゐ・ゑ」は「い・え」に直すというルールがあります。また、「au」は「ō」に直すので、4行目「さやう」は「さよう」になることも覚えておきましょう。

(三) 傍線(2)から始まる言葉は、「大名」が「近習の侍」に対して話しかけたものです。「予が顔が猿に似たと、人みないふ」とありますが、人々が「猿に似た」と言っているのは、やせて色が黒い大名の顔、つまりこの言葉の主の顔です。ですから、この「予が顔」というのは「わたしの顔」という意味になります。

(四) 「ゆゆしくも申したり」は、〈よくぞ申した〉という意味です。これは大名が直前の言葉を聞いて言った言葉です。この直前の言葉の「」の前には、「臣うけたまはりて(〓家来が〈大名の言葉を〉お聞きして)」とあることから、これは家来が言った言葉だとわかります。よって主語は、②の「臣(〓家来)」です。

(五) この話のあらすじをまとめてみましょう。  
やせて色の黒い顔をした大名が、自分の顔が猿に似ていると人々が言っているのは本当なのかと気にしているので、「世間では(殿様(〓大名)の顔が猿に似ているのではなく)ただ猿の顔

が、殿様に似たと申しております」と家来が取りなします。「猿の顔が大名に似ている」のも、「大名の顔が猿に似ている」のも、猿と大名が似ている点では変わらないのですが、それについては気にしなかったのでしょうか。大名は、家来の言葉に「その通りであろう」と納得し、怒らなかつたのです。このため、最後に「大名はささいなことは耳にとめないほどおおらか」という意味の諺「大名は大耳」が引き合いに出されています。ここから①が正解です。

②のように「似ていない」となぐさめているわけではありませぬ。また、今回の話を聞いてはじめて「大名は大耳」としてもじもの者が言っているのではなく、以前からそういう諺を言い伝えている、ということなので③も間違い。人々が「大名の顔が猿の顔に似ている」と言っているのがうそだった、という記述はないので④も違います。**行間を読むのが大変ですが、注を手がかりにがんばりましょう。**

## 口語訳

顔つきが格別にやせて色が黒くていらつしやる大名がいたが、(その大名が)そば近くに仕える侍に向き合いなさつて、「わたしの顔が猿に似たと、人々が皆言っていると聞いたが、事実か、うそか」(とおつしやつた)。その家来がお聞きして、「これはおそれ多い仰せごとにございます。だれがそのような事を申し上げたのでしょうか。世間では(殿様「〓大名」の顔が猿に似ているのではなく)ただ

猿の顔が、殿様に似たと申しております」(と取りなした)。大名がお聞きになつて、「よくぞ申した。その通りであろう」と言つて、少しも怒らなかつたのは、しもじもの者が申し伝える、「大名は大耳(〓大名はささいなことは耳にとめないほどおおらか)」(という諺が本当だから)であろうか。